

被爆した写真

寄贈／福原信太郎

爆心地から約 2500m 段原日出町

坪中幸代さん(27 歳)は自宅で被爆。

家族は無事だったが、家の外では全身にガラス片を浴びた人などが助けを求めている。自宅だけが人の手当てをしていると、負傷者が集まって来た。幸代さんは、「あきらめちゃいけないよ！頑張るんよ!!」と手当てを続けた。

自宅のタンスに入れていて被爆したこの写真は、戦後も幸代さんが大切にしていたものである。

寄贈者(幸代さんの孫)のお話から

「困った人を放っておけない性格だった祖母は、懸命に手当てを続けたようです。戦後、原爆の話をすることはほとんどなく、あるとき川(被爆時にはいっぱい死体が流れていた)の近くを通りかかった時、ポツリと「さえんかった」とつぶやいたのが印象的でした。」

